

RAILWAY & CINEMA

「ナビゲーター ある鉄道員の物語」

2001年 英・独・スペイン 96分
発売・販売元/ジェネオン エンタテインメント
価格/3,990円(税込)



今回は、二〇〇一年に製作された比較的新しい鉄道映画「ナビゲーター ある鉄道員の物語」を紹介する。監督は、アイルランド独立に伴う悲劇を描いた「麦の穂をゆらす風」で二〇〇六年カンヌ映画祭パルムドール(最優秀作品賞)をとったケン・ローチである。ケン・ローチは、以前にも触れたことがあるが、市場主義、ナシヨナリズム、権威主義等から生ずる非人間性に極めて批判的な正義感の強い社会派監督として知られ、出世作の「ケス」や「自由と大地」などの傑作を撮ってきた英国映画界の第一人者である。本作品では、市場主義に焦点を当てており、彼の特徴が遺憾なく発揮されている。

何といっても本作品で特筆すべきは、対象が保線の労働者であることであり、数ある鉄道映画の中でも、鉄道の保線を扱った唯一のものではないかと思う。ご承知の通り、英国国鉄は一九九三年に民営化されたが、日本の場合と異なり、民営化後も鉄道の不効率性や安全性を含む低い信頼度は改まらなかった。その必ずしも成功しなかった民営化を、労働者側から批判的に撮ったのが「ナビゲーター」である。日本では五、六年前に同じ監督の

鉄道と映画 — 20

男たちの仕事への誇り、家族への愛。
鉄道労働者たちの日常をリアルに描く。

The Navigators

「ナビゲーター」ある鉄道員の物語



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FCC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

「ブレッド&ローズ」と共に公開されたものの、こちらの方は、あまり話題にならなかったと記憶している。

ストーリーは、英国国鉄が民営化された際、保線部門は分割された上、鉄道運営会社から独立した民間会社として発足したところから始まる。民営化に伴い、従来の労働協約は反故となり、労働環境は悪化し、合理化が強まる。これに反発して会社を辞めた保線労働者も、結局行き場が無く、下請けとして以前よりはるかに悪化した環境で保線の仕事を請けざるを得なくなる。国鉄で一緒であった仲間同士が偶然働くことになった信号設置の仕事で、事故が発生する。かつて安全第一を旨とした仲間たちは、いかにこの事故に対処するのか。

この映画の優れた特徴のひとつは、ケン・ローチの観客を引き込んでいく手法であるリアリズムが冴えていることである。脚本を書いたロブ・ドーバー自身が英国国鉄に勤務し、その体験を基にしているだけに、保線要員の人たちの日常の会話や思考がいきいきとしており、ユーモアにあふれている。一方、これも彼の映画の優れたところであるが、センチメンタルなところはいささかも無い。

八十年代のサッチャー首相の時代から始まった経済の効率化や自由化が、英国病とまで言われた当時の経済状況を一変し、現在に至る経済的な繁栄をもたらしたことは事実である。しかし、当時まで英国に存在した牧歌的な労働環境や地方の生活を破壊したこともやはり事実であり、この様子は、九〇年代から二〇〇〇年代にかけての英国映画「フル・モンテイ」、「ブラス!」、「リトル・ダンサー」等に背景として描かれている。「ナビゲーター」がこれらの映画と決定的に異なる点は、前者が古きよき時代にノスタルジアを感じつつも、市場主義を受け入れた後の状況に、若い世代が新しい感性で対処していく様子を主題としているのに対し、本作品は、市場万能主義の否定的な影響が次の世代まで蝕んでいくことを主題としており、ラストシーンは一見穏やかであるが、問いかけてくるところは「フル・モンテイ」等の比ではない。ある意味では、現在の反グローバリゼーションの考えにも通じる大変オーソドックスな市場万能主義を否定する映画と言える。